

「手書き」は思考力、判断力の基盤



卒業論文の中間報告後にゼミ生と談笑する鈴木教授（右端）

長崎市文教町、長崎大

教育現場のデジタル化 発達段階見極め導入を

手で文字を書くことは、学校で教わる最初の学習。教育学部義務教育開発講座の鈴木慶子教授は「手書き」と「教育学」の関連に着目している。「身体を使って時間をかけて頭に刻み込むという作業は、将来的な思考力や判断力に結び付いていく」。教育現場のデジタル化が進むにつれ、手で書くという行為が減っている現状を受けて「失うものは何か」と研究を進めている。

例えば、パソコンで文字入力すると、漢字変換は候補から選ぶため、考える過程が減る。多用するうちに、漢字が書けなくなったと感じる人も多いのではないだろうか。鈴木教授が研究を通じて見えてきたのは、手で書かなくなることによる記憶のクラウド化と概念理解の弱体化。「思考や判断の材を脳の中に保持するのではなく、外部に置いてある状態になっている。それが思考力や判断力の低下につながりかねない」と指摘する。

文字を手で書くことは認知的、運動的、知覚的要素を複雑に連動させる必要がある。医学分野でも、京都大学の研究チームが「学童期の特に手書きでの読み書き習得は、老年期の認知能力維持につながる」という理論的枠組みを提唱している。

一方で、小学校の授業に英語やプログラミングが導入され、1人1台のタブレットが支給される時代。学校の限られた授業時間に対して学習する科目が増えれば、必然的に優先順位を決めざるを得ず、学習の効率化も図られる。鈴木教授は「時間がかかり、負担が重い手で書くという機会は確実に減っていくでしょう」と危惧する。

この研究に基づき、鈴木教授のゼミ生で4月から教育分野に就職する4年生のうち、卒業論文のテーマに「手書き」を選んだ学生グループもいる。小中学生の授業中のメモ取りとテスト結果の相関関係などについて調査を行っているところだ。

鈴木教授が提案するのはICT教育の“適材適所”。「小学4年生ごろまでは、手や身体を使う過程を大事にして、デジタルツールは高学年ごろからの導入が望ましい。手書きは教育に必要。失いたくない」と。

（黒川美穂子）

略歴



長崎大学教育学部 鈴木 慶子 教授

すずき・けいこ 千葉県出身。千葉大学教育学部卒業、同大学院教育学研究科修了。千葉県立高校の国語科教諭を経て、1994年長崎大学に着任。2008年から現職。

著書に「文字を手書きさせる教育」（東信堂）など、HPに「書室」がある。国語科教師との勉強会「番の会」主宰。趣味は美術鑑賞。